


 はじめに

Greeting

はじめましてのみなさん、はじめまして。サークル・規格外企画の、百合ヶ丘くぐいと申します。この本は、「パソコンで発車メロディを作るにはどうしたら良いのか？（しかもタダで）」を解説した、DTM…Desk Top Music : PC による音楽制作の指南書です。対象者は、今まで作曲をしたことが無くてこれから始めたいけど、作曲なんてできないよう、けどお手軽に作曲してニコニコ動画あたりにアップしてハハしたいナ…という、極めてローカルな人を対象に書かれています。別にアップしなくてもいいんですけどね！

いやあ、それにしても、久々の評論です。同人活動を始めて最初のジャンルもこの評論ジャンルでした。そのときは「カロリータ」という、自分がロリコンかどうか、もしロリならばどれくらいのロリなのか…重度のロリか、はたまた軽度か…を判定するウェブサイトの仕様解説書を4巻ほど制作してきました。それが3年前のことでした。最終巻である「カロリータ白書(4)」を読み返してみると、『表紙に釣られたみなさん、おめでとうございます、あなたはロリコンです！』みたいなことが書いてありました。要するに、表紙に興味を惹かれるかどうかで、すでにロリコン判定をしていたというものでした。ちなみにそのあとはしばらく同人音楽ジャンルにいましたが、なんかあのジャンル流行廃りが露骨でジャケ g (r y

さて、今回の表紙をみてみましょう。どうでしょう。こんな部屋でパソコンする女の子を皆さんは好きになれますか？ **私は割と好きです。**まあそれはいいとして、パソコンがあつたり、電車があつたり（なんか小*急の M*E ぽいが気のせい）、オルゴールがあつたりします。

従いまして、強引に結論づければ、本書を表紙だけで手にとった人は、きっと、パソコンが好きで、小*急も好きで、特急ロ*ンスカー萌えて、オルゴールの音色にうっとりしちゃう人に違いない。そうだ、ぜったい。

…いい加減に本書の概要をお知らせすることにします。

冒頭にも述べましたが、本書は、パソコンで発車メロディを作ろうという本です。あるいは、既存の曲を発車メロディ風にアレンジしようという本です。具体的には、以下のような読者を対象にしています。

1. パソコンで音楽を始めたい人（しかもタダで）
2. 発車メロディが好きでもう自分で作りたくてたまらない人（いるのか？）
3. 好きな曲を発車メロディもどきにしてしまいたい人（いるのか？？）
4. あわよくば、それをニコ*コにアップしてしまいたい人（俺じゃん！）

あ、でもニコ*コにアップする方法そのものは他をあたってくださいね、素材を作るところまではなんとかこの本でがんばってみますので。

また、本書を読むのに求められるスペックはさほど高い必要はないと思います。具体的には、

1. 義務教育終了程度の音楽の授業にでてくるような楽譜が読める人
2. Windows XP なパソコンをそれなりに扱える人(本書ではXP 向けの内容があります)
3. インターネット接続環境がある人 (ADSL で十分です)
4. フリーソフトの DL, インストールから簡単な設定ができる人

くらいでしょうか。いわゆるパソコン初心者や、ネット初心者ですと厳しいかもしれません。DTM の音楽制作の初心者向けの同人誌であるとお考えください。なお、ソフトの使い方はネットにたくさんあるので、心配無用でしょう。本書でも簡単に扱いますけどね。

本書を制作するのに先立ち、音楽を作ったことの無い友人に、発車メロディアレンジの制作方法を指南したところ、「苺ましまろ」の楽譜を渡して 10 秒程度の発車メロディアレンジをものの 1 時間で完成させました。ちょっとびっくりしました。

なお、本書は発車メロディアレンジの「作り方」を私なりに解説するものであって、どこのホームでどんな音楽が流れるかを集めたいいわゆる「データ本」の類ではないことにご注意ください。それでも、発車メロディに興味のある人なら、どのようにして発車メロディっぽい音楽ができるかという内容そのものは、楽しんでいただけるのかなあ…とちょっと思ったりします。

本書の構成としましては大きく 2 つに分類されます。まず前半では、発車メロディが音楽的にどのような構造でできているのかを考えます。そして後半では、前半の結果から実際に発車メロディを作る手順を紹介します。この本を読み終わるころには、1 曲の発車メロディができあがっていることでしょう。そして、本書で得た知識を元に、さらに他のジャンルの曲作りにも挑戦してみようという気になっていただけなのであれば、筆者としてこれほど幸せなことはありません。ぜひ、ユーザーからクリエイターになってみてください。

なお、上記のような思想に基づいて執筆したため、全体的にかなりデフォルメしております。とにかく読みやすいものを、ということです。従いまして、例えば用語の説明について、間違った記述はしないように心がけましたが、よく言えばわかりやすく簡単に、悪く言えばいい加減な、ざっくりとした記述が多々あります。ただし、専門用語をあえて多く取り入れるようにしました。これはあとで読者が独学するときのための検索性の向上 (と、筆者が書きやすいからということ) を狙っています。もちろん、用語がでてくるたびにデフォルメされた説明を記述するように心がけましたので、その点をご心配なく。

最後になりましたが、ここで謝辞を。まず、カロリータ白書時代を含め、数々の挿絵や CD ジャケット、そして今回はついに表紙と挿絵すべてを担うという無茶振りに付き合ってくれた日向あずり先生。そして、製本作業や売り子をしてくれた、詠美ちゃんとよちおどん。さらに、本書の内容の実証実験に付き合ってくれた、風良顧問とやっぱりよちおどん。そして本書を手にとって頂いたすべての皆様に、まっ
*→れスペクタクフル級の感謝を、心から捧げます。